

# 令和4年度 輪之内町立仁木小学校

学校の教育目標	<b>ひろい心もち 豊かに表現できる子</b>
経営の重点	・学校の教育目標の具現に徹する学校経営 ・一人一人のよさを引き出し、生かし、伸ばす意図的・継続的な指導・支援の推進 ①安全教育(感染症対策) ②学級経営(心身のケア) ③学習指導(学びの担保) ④道徳教育 ⑤家庭・地域との連携 ⑥働き方改革 「ひたむきに取り組む姿を徹底して褒める」

評価基準 A(3ポイント): 実践し、効果をあげることができた。  
 B(2ポイント): 実践し、一応の効果をあげることができた。  
 C(1ポイント): 実践し、僅かだが効果をあげることができた。  
 D(0ポイント): 実践したが、効果をあげることができなかった。

町の重点	評価の窓	教員評価ポイント	評価	2学期までの成果	3学期及び来年度以降の課題と改善策
【学校経営】 全教職員が協力をし、活力ある学校経営をする。	勤務の適正化と教職員が健康でやりがいをもてる経営 地域との連携による学校づくり	87	A	□働き方改革を意識して昨年度より勤務の適正化を図ることができた。 □職員室での明るい雰囲気作りを心がけ、心身共に健康な職員で学校運営ができた。 □働き方の見直しを適時行い、残業時間を減らすことができていた。 □学級担任の負担軽減になるようにフリーの職員が雑務等を積極的にこなすことができていた。 □コロナ禍での行事の工夫によって、地域や保護者との関わりのある行事ができた。 □管理職の働きかけのもと早く帰るように心がけている。	●職員一人一人が「働きやすい」と感じられるよう取り組みを行い、児童も「明日も来たい」と感じられるような取り組みを継続していく。
【研修】 自己の課題を明確にし、主体的に研修を進め、確かな指導力を身に付ける。	学校教育目標実現に向けて資質向上を図り、組織的・継続的な研修の実施	82	A	□職員自ら主体的に研修をしたことを日頃の実践に生かしたり、他の職員に広めたりすることができた。 □研究授業を通して教員がお互いの授業から学び合ったり、自分の授業について振り返ったりして授業改善を行うよう努めることができた。	●次の研究内容になっても、今年度の研究したことが生かせるようにしていく。 ●研修を通して日頃の実践に活かすことができたが、児童の成長のために今後も継続して指導していく。
【教科指導】 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るとともに、思考力・判断力・表現力及び自ら学ぶ意欲や態度を育て、学力向上を推進する。	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善	76	B	□昨年度より、交流活動などを取り入れて活動する場面を増やすことができた。 □児童のタブレットやICTの活用を用いて、自分の考えを表現し、交流に生かすことができた。 □ミライサウンド・Gifuウェブラーニングを活用し、授業の終末に習熟を図ることができた。 □町研に向けて教材研究の中で、学力差がある場合でも工夫し、基礎的な力をつけようと考えていることができた。	●感染防止対策を行いながら、交流の場の工夫をさらにしていく。 ●最低限の教材の準備で大きな効果(児童の力)になるような工夫をする。 ●今後も様々な教科で主体的な学び、対話的な学びができるように吟味して行っていく。 ●教師が出過ぎず、児童が主体的に学ぶことができるようにしていく。
【道徳教育】 自己を見つめる力と他を思いやる心を育てる。	生き方(命の大切さ)についての考えを深める道徳教育の充実	71	B	□道徳の時間だけでなく、一人一人が大切な存在であり、命が1番大切であることを様々な活動を通して子どもたちに伝えることができた。 □資料をもとに、主人公の行動などから自分の普段の生活を見つめる時間を毎週もつことができた。	●定期的に生命尊重や人権に関わる価値項目の授業実践を行う。 ●授業で学んだ価値項目について、日常で意識・実践ができているか見届けを行い、よさを広めていく。
【外国語教育】 外国語に慣れ親しみ、コミュニケーション能力を高める。	主体的にコミュニケーションを図る姿が具現される指導方法等の工夫	76	B	□外国語の専科とALTによる指導により、ゲームや対話活動を中心にしてコミュニケーションを図る姿があり、より専門的に学ぶことができた。 □タブレットを使いながら相手の子に指し示してコミュニケーションをとるなど分かりやすくすることができた。 □明るい雰囲気で行われ、子どもたちが楽しく活発に参加できている。	●授業での様々な交流活動を今後も継続していく。
【総合的な学習の時間】 探究的な学習を通して、よりよく問題を解決する資質・能力を育てる。	「ふるさと輪之内」に学ぶ態度と輪之内を愛し誇りに思う心を育成する探究活動の充実	76	B	□それぞれの学年が年間指導計画に基づき学習を進めることができた。 □地域の保存会や専門的な方を外部講師による出前授業を位置づけ、より深い学びを得ることができた。地域や保存会、専門的な方を講師に迎え、探究的な学習ができた。	●6年生の共生社会の学習では、新型コロナウイルスの制限等により地域の老人ホームや施設等に参観できなかったため、共生社会と輪之内をつなぐ授業を行っていくようにする。 ●今後さらに工夫して、地域と関わることができるような体験活動を取り入れていく。 ●年間の見直しをしっかりともち、今後も計画的に実施していく。
【特別活動】 所属感を高め、よりよい生活や望ましい人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。	望ましい人間関係や学級集団としてのまとまりを育てる学級経営の充実(QU検査の活用)	78	B	□委員会活動や行事を核に、学級経営や自治力の向上に生かすことができた。 □係活動や班活動を通して、自分の仕事に責任をもち、仲間と協力することの大切さを実感できた。 □計画的な行事や学活等を通して、子どもたちが一丸となって活動できる姿があった。 □QUを使って、クラスの実態を知ることができた。	●QU検査でわかったクラスの実態を、実際に指導までつなげることは難しい。
【生徒指導】 共感の児童生徒理解に徹し、よりよい人間関係の形成を図り、自己指導能力を育てる。	いじめ・不登校・自殺等の未然防止と早期発見・対応の強化	93	A	□生徒指導主事を中心として、いじめや不登校傾向児童への指導を素早く全校体制で行うことができた。 □アンケート結果を、その日のうちに速やかに共通理解を図り、指導に生かすことができた。 □アンケートと教育相談をつなぐことで、日常の児童の様子を、細かく把握することができた。 □毎週の生徒指導交流によって、学校全体で知っておくべき情報を適宜共有し、教職員一人一人がいじめや不登校の未然防止に努める意識をもつようになった。 □問題があったときにケース会議を行い、どのような対応をするべきかを考えることができた。 □「ぎふのいのちの教育」について適時放送等で全校に啓発することができた。	●アンケートの後の朝活動では時間が十分取れないことがあり、聞き取りが十分にできなかったのかが心配なことがある。教育相談の時間を確実に取って実施する。 ●不登校気味の児童が増えてきたので引き続き、チームで対応していく。
【キャリア教育】 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育てる。	勤労観・職業観を育成する体験活動の位置付けと事前・事後指導の充実(キャリアパスポートの活用)	71	B	□社会見学・校外学習・出前授業の実施により、実際に働く人の姿や話などから、勤労観・職業観を学ぶことができた。 □キャリアパスポートを活用し、定期的に指導を行い、自信をもって活動をやりきることができた。	●行事後に児童がキャリアパスポートを書いて終わってしまうことが何度かあった。自分たちの役割と勤労観や職業観を関わらせて、継続してキャリア教育を行えるようにする。 ●コロナ発生以降、勤労体験や体験的な活動が減っているため、5年生の米作りをはじめ学級園の作業や運動場の草取り、けんがいぎくの世話や地域(河川)のごみ拾いなど、以前やっていたような勤労体験を取り入れたい。
【健康安全教育】 運動に親しみ、進んで健康で安全な生活を営む態度を育てる。	感染症対策を講じた上での、体力向上のための取組 自ら命を守りきる防災意識を向上させるための指導方法や指導体制の工夫改善	80	A	□年間計画に沿って、洪水、Jアラートの訓練などいろいろな想定で命を守る訓練を継続的・計画的に実施ができた。 □みどり時間に児童が外で遊んだり、縦割り活動で長縄を位置づけたりして、体力を向上させることができた。	●子ども達の体力低下を少しでも回復できるような工夫が必要。(学級遊びやなかよし遊びに取り入れるなど) ●マスクの危険性についても指導していきたい。 ●体育の授業では、運動時間を十分確保し、運動能力を高める指導を確実に行う。コロナの状況を見て元にもどせるものもどしていき、体力の向上に努めていく。 ●実際の場面でも実効性のある命を守る訓練を検討していく。
【特別支援教育】 一人一人の教育的ニーズに応じ、自立し社会参加するための基盤となる力を育てる。	特別支援教育コーディネーターを中心とした校内支援体制づくりと合理的配慮の構築	82	A	□年度初めに、一人一人の特性について全職員で共通理解を図り、日々の指導に生かすことができた。 □通級や支援学級、医療機関と連携して個に応じた手立てを工夫できた。 □支援学級の児童との交流をできる限り増やし、楽しく関わることができた。 □支援計画を通して、具体的な支援を行うことができた。 □校内教育支援委員会では、子どもたちの困り感や様子を共通理解し、適切な就学や支援について話し合うことができた。 □コーディネーターや指導教諭を中心に児童の実態に合わせた支援体制づくりができた。	●個別の支援計画や指導計画等で、児童の困り感や支援の手立てなど来年度にしっかりと引き継げるようにしていく。 ●引き続き1人1人の児童の様子を観察し、必要に応じた支援をしていく。

町の重点	評価の窓	教員評価 ポイント	評価	2学期までの成果	3学期及び来年度以降の課題と改善策
【人権教育】 自他の大切さを認め、互いに人権を尊重する望ましい人間関係を醸成する。	児童生徒と全教職員が一体となったいじめや差別を許さない学校・学級づくり	87	A	<input type="checkbox"/> 人権担当から人権に対する全校への働きかけがあり、差別は許さないという意識を高めることができた。 <input type="checkbox"/> 企画委員会の人権の取り組みでは、全校で仲間のよさを認める活動を行うことで、互いの人権を尊重することができた。 <input type="checkbox"/> 日頃からいじめや差別を見逃さないように全職員で見届け、誰かを傷つけるような行為には毅然とした態度で対応できた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日常的な人権教育が必要。教師1人1人が児童の言葉使いを注意深く聞き、その場で指導するなど継続的に指導する必要がある。</li> <li>●教師の人権教育を磨く研修を取り入れたい。</li> <li>●よいことみつけなどで他者理解を行うことができたが、相互理解まで指導ができないことがあった。適宜学活等を通して、他者理解等を行い、人権感覚を養っていききたい。</li> </ul>
【ICT教育】 児童生徒の情報モラルを高め、情報社会に対応できる情報活用能力を育てる。	ICTを有効活用した学習活動の充実（「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実）	82	A	<input type="checkbox"/> 算数の授業では、児童用デジタル教科書を活用し自分のペースで練習問題に取り組み自分で答え合わせをしたり、評価問題を配付・回収し評価したり、自分の考えを工夫して表現したりできるようになった。 <input type="checkbox"/> 情報委員会から、学校や家庭で情報モラルについて考える機会がもてるよう働きかけた。 <input type="checkbox"/> 研究でICTの活用を取り組んだことで、いろいろな授業で全校体制でICTが使えるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●児童用タブレットの授業での活用することが当たり前になったが、継続して効果的な使い方を考えていく必要がある。4月以降も全校に算数の学習者用タブレットが導入されるとよい。</li> <li>●今年度までに作成した発表ノートのデータを来年度以降も使用できるように準備をしていく。</li> <li>●ネット環境が安定せず、タブレットが起動できなかったり反応しなくなることがあった。普段から整った環境が必要である。ネットワークが遅く、特にZoomや動画再生のときに影響があった。（モバイルルーターで対応したが、ルーターにも限度がある）</li> <li>●研究が終わっても全職員が今までと同じように、ICTを活用していく。また、そのための研修も位置付け、全職員が確実に</li> </ul>

学校関係者評価)

- 学校全体が落ち着いていて、よい雰囲気ができている。
- 児童の行動や気持ちの変化に対して、教員同士の交流が見られる。
- 室内の整理がされており、資料等がうまく学習に役立てられている。
- 児童の姿を見るとICTに対する関心が高く、学習にも多く活用されていた。